



椿がこれから。



北門を入ったすぐに柳。桜が終われば、新緑の季節。



旧暦では今日は3月10日。桃の節句の時期です。



2017/4/7
(金)

春本番

さくら満開、今日は雨。花粉症の人にとっては今日がお花見日和か。気温も高く、22度の予想。酒宴グループも少ないだろうし、花粉症でなくても、散歩によいかもしれない。

春は独立した季節でもあり、事務所をもうけた季節でもある。そのせいか、今ここにあることに思いめぐらす。よくぞ、あの方この方、出会ったものだなあと、ふりかえる。

出会いの半分は自分が動いて、あと半分は先方が見つけてくれたからかもしれない。実際にそういうことを言ってくれた人がいた。別の部署に来ていたところを遠くから見ている、感じるころがあったとか。

春本番、身をひきめ、2017年度もまた精進。

2017/4/14 知性のむこう感
(金) 性

今日は晴天。気温もあがりそう。造幣局の桜の通り抜けは人がおしよせているのではないかと。桜の季節もまもなく終わり、次は藤。となると、すぐに初夏。あれよあれよとすでに今年も三分の一が終わる。

『知性のむこうに感性がある』。独立以来、ずっと大切にしている恩師の言葉。「Style - 仕事の原点」ページにも載せているし、今年の立春レターのトップ記事のタイトルにもした。

恩師の話の中からこの言葉をキャッチしたのが、自分。同席していた友人は別の言葉に唸っていた。同じ話を聴いて、つかみとる部分が違う。いつも感心することだけど、個々人ならではの精神がそこにある。

知性は、「知覚されたものを整理、統一して新しい認識を生み出す精神の働き。また、知覚・直観・悟性など知的能力の総称」。悟性は、「論理的に物事を考える能力。理解力」。

感性は、「(悟性、理性に対して)外界からの刺激によって何らかの印象を感じとることができる直観的・受動的能力」。理性は、「物事を概念的に論理的に思考したり、自己を抑制する能力」。

『無の探究』(柳田聖山・梅原猛 角川ソフィア文庫)に、「定」(心の平安、安らぎ)は知恵であると書いてあった。心の平安は知の働きの賜物。だから、自分でしっかり知を働かせないと獲得できないということ。

今年のテーマは「精神の糧を豊かに!」。ここでも考えていくとしよう。

2017/4/21 男子学生の背中
(金) に

今日は曇り空。予報では春雨のあるとか。春雨、いい言葉。昨日は穀雨。5月5日は立夏。淡々と季節はすぎる。

バーン!!! 前方で音がして、とっさに顔をあげた。階段を上がりきったところだった。後ろ姿は中学3年か高校1年生、ダークグレーの制服にスポーツバックを背負った男子が、地下から地上の外へ出るドアを、右足で激しく蹴った音だった。勢いよく開いたドアから、歩を緩めることなく、彼は出ていった。まわりに人はあまりいなかった。

啞然とした。目で背中を追った。機嫌が悪くなることがあったのか、それとも、いつものことなのか、風をきって歩くような、前から見れば無然とした表情を浮かべているに違いない、そんな雰囲気は背中にみえた。服装の感じでは、不良っぽくはなく、かといって真面目というのでもなく、ごくごく普通の男子学生という印象が逆に気になった。

見ている人がほとんどいなかったから、ドアで鬱憤を晴らしたとも考えられる。大人だけでなく子供にとってもストレスの多い社会だから。もしいつものことだったなら、本人の社会性がどう養われてきて、これからどういう大人になっていくだろうと気にかかる。彼らがこれからの社会をつくっていくのだから。

「最近は本当に、これまで以上に差が激しくなっているんじゃないかなあ…」。日曜夕方に聴いていたFMで音楽プロデューサーと編集者の二人がそんな話をしていた。自分でじっくり考える人とそうでない人、人を思いやれる人とそうでない人、目に見えないものを観てとれる人とそうでない人、等等。

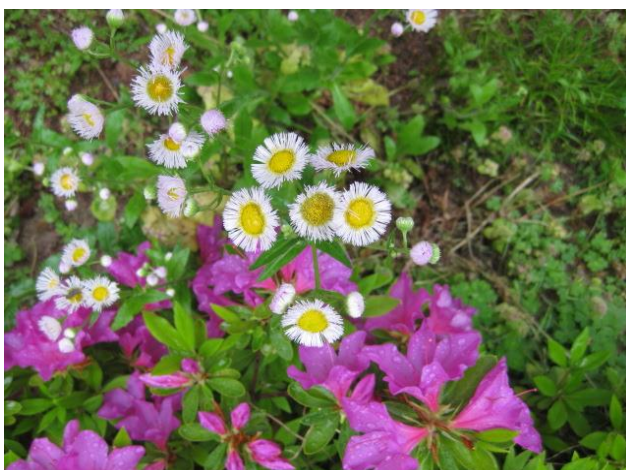
かの男子学生には前者にあたる大人に出会ってほしい。

2017/4/26
(水)

うつぼ公園

最近歩く回数が少なくなった。これはいけない。花粉や黄砂の心配がない今日は雨。本降りになる前の朝、久しぶりにうつぼ公園。桜はおわり、ヤマブキが咲き始めた。新緑が映える。





2017/4/27
(木)

出来

きれいに晴れてきた。昨日の雨のおかげか。久しぶりにうつぼ公園を歩いたら、新緑が瑞々しかった。これかしばらくは街の風景も潤う。明後日から大型連休、5月5日は立夏。

「人間そう簡単には変わらない」。そう言って首相は早々に復興相の更迭を決めたそう。一昨日電話で話していた同業の知人が、「何度言ってもわからない人はわかりませんよ」。

それは「出来」と、ある著名な物理学者が親戚の一人に語ったらしい。その聞いた本人が、ずいぶん前、新聞のコラムで紹介していた。たぶんそれはそうだろうと思った、よしあしの話ではなく。

この人はなんという出来だろうと、『数学する人生 岡潔』（森田真生編 新潮社）を目を見張りながら読んでいます。最初は「独立研究者」と称す編者に親近感をもったのだったが。

学者の中でも数学者が一番ユニークで魅力的だと他の分野の女性研究者が話していたのを聞いたことがある。凡人からみてもそう思う。数式に「美しさ」を求め、考え抜くからではないか。

『人の心というのは、簡単にいえば、二つの要素からなっています。一つは懐かしさ、もう一つは喜び。この二つを同時に感じるのです』。

気になった箇所に付箋をつけているが、半分読んだだけで、付箋が乱立している。「独立研究者」の畏敬する気持ちがよくわかる。さて、「岡潔」の書いていることに誘われるのは、これは〈懐かしさ〉？